# ANNOUNCEMENTS

## I. 第1回日本行動遺伝学研究会 予告

日時：平成5年3月20日（土，春分の日） 午前9時～午後5時
場所：東京医科歯科大学 1号館9階 特別講堂
演題募集：1演題約15分（討論を含む）を予定しています．演題名，演者名，所属を明記し，ワープロでB5 1枚の抄録を下記までお送りください．
演題応募締切り：平成5年1月16日（土）必着
人間の行動，心理・精神機能の遺伝学的な側面に関心のある方の参加ならびに研究発表を歓迎します．
日本行動遺伝学研究会世話人：阿部和彦（産業医科大学），風祭 元（帝京大学），堺 俊明（大阪医科大学），融 道雄（東京医科歯科大学），中根允文（長崎大学）
連絡・問い合せ先
〒569 高槻市大学町2-7 大阪医科大学神経精神医学教室 米田 博
Tel 0726-83-1221 Fax 0726-83-4810

## II. 第33回日本先天異常学会学術集会 予告

会期：平成5年7月21日(水)・22日(水)・23日(金)
会場：名古屋市中小企業振興会館（吹上）
会長：三浦隆行（名古屋大学医学部整形外科学教授）
学術集会
1. 会長講演：「手の先天異常」三浦隆行（名古屋大学整形外科）
2. 招待講演：「Cellular positional information in chemical and genetic teratogenesis」
Nigel A. Brown, Ph.D. (St. George's Hospital Medical School)
3. シンポジウム
(1) 先天異常における最近の染色体研究
(2) 顎顔面先天異常の臨床
(3) 先天性骨系統疾患の基礎と臨床 ―小人症を中心に―
(4) 臓器別胎児異常の出生前診断とその治療
(5) 神経堤細胞と先天異常
(6) 四肢の先天異常 ―その基礎的・臨床的研究の発展―

※学会出席，研修講演など，各科の臨床認定医資格継続申請に必要な手続きを行っております．詳細はプログラムに掲載いたします．

演題募集：日本先天異常学会誌「先天異常32巻4号（12月発行予定）」に綴込みの案内に従い，同誌に綴込みの用紙を使用してください．なお2題以上出題予定の方，未入会で出題希望の方は送付先住所・氏名を明記して，返信用切手 ¥175 を同封のうえ12月1日以降に下記事務局まで直接応募用紙を請求してください．
演題応募締切り：平成5年3月31日（水）必着

連絡・問い合せ・応募用紙請求先

〒461 名古屋市東区白壁 1-45 白壁ビル 6 階 ㈱セントラルコンベンションサービス内
第 33 回日本先天異常学会学術集会 事務局
Tel 052-971-5552 Fax 052-951-3600

## III. 第 7 回「大学と科学」公開シンポジウム 「生殖系列 —親から子への生命の流れ—」

日時：平成 5 年 2 月 17 日（水），18 日（木）
場所：有楽町朝日ホール（有楽町マリオン 11 階）
（予め右記に申込み予約のこと．〒100 千代田区霞ケ関 3-2-2 文部省学術国際局学術情報課，直通 Tel 03-3581-1932）

≪プログラム≫

〔第 1 日目〕

連続する生命 —生殖と生殖系列—
毛利秀雄（放送大学副学長）
動物の生殖行動における利己と協同
日高敏隆（京都大学教授）
♂と♀の発育と機能の違い
高橋廸雄（東京大学教授）
♂と♀の遺伝的違い
中込弥男（東京大学教授）
精子分化のしくみ
安部真一（熊本大学教授）
卵子の発生と成熟
岸本健雄（東京工業大学教授）
受精における卵と精子の相互作用
星 元紀（東京工業大学教授）
受精から発生へ —卵子の反応—
片桐千明（北海道大学教授）
受精における精子側の変化
星 和彦（福島県立医科大学助教授）
体外受精技術について
豊田 裕（東京大学教授）

〔第 2 日目〕

生殖医学の新しい潮流 —その技術と倫理—
森 崇英（京都大学教授）
妊娠は着床に始まる
村松 喬（鹿児島大学教授）
胎盤の役割
舘 鄰（東京大学教授）
妊娠維持のしくみ —胎児はなぜ拒絶されないか—
森 庸厚（東京大学教授）
家畜の改良増殖・野生生物保護での新技術
入谷 明（近畿大学教授）
遺伝子組換え技術の生殖研究への適用
帯刃益夫（東北大学教授）
初期胚操作 —キメラ動物の使い途—
野口基子（静岡大学助教授）
有用トランスジェニック動物
岩倉洋一郎（東京大学助教授）

# 日本学術会議だより　No.27

# 秋の総会開催される

平成4年11月　日本学術会議広報委員会

日本学術会議は去る10月21日から23日まで，第115回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは，同総会の議事内容及び総会中に発表した会長談話等についてお知らせします。

## 日本学術会議　第115回総会報告について

日本学術会議第115回総会（第15期・第4回）は，10月21日～23日の3日間開催されました。

総会の初日は，会長からの前回総会以降の経過報告に続いて，運営審議会附置委員会，部会，常置委員会，国際対応委員会，特別委員会の各委員長，部長からの報告がありました。また，本年9月27日から10月11日までの間，二国間学術交流委員会の代表団がアメリカ合衆国を訪問し，アメリカ合衆国の学術の現状を視察するとともに，大統領補佐官を始めとする連邦政府機関の関係者，国立科学財団の関係者，その他関係機関の関係者との意見交換を行い，多大なる成果が得られたとの訪米報告が行われました。午後からは各部会が開催され，国際対応委員会や研究連絡委員会の在り方等について審議が行われました。

なお，二国間学術交流の成果等に関する「平成4年度日米学術交流について」の会長談話を21日付けで発表しました。

総会2日目は，学術分野における国際貢献に関しての自由討議が行われ，国際貢献の意義，方針等について活発な討議が行われました。本件については，日本学術会議第15期活動計画の中に重点目標として掲げられており，また，昨年秋の第113回総会において内閣官房長官から，学術研究の分野で我が国がどのような国際的貢献をなすべきかについて全学問領域から総合的に検討し，意見を出すよう求められ，以来，日本学術会議としては重要案件として審議してきたものです。

午後からは，米スペースシャトル「エンデバー」で微小重力実験に取り組んだ毛利衛さん，向井千秋さん，土井隆雄さんの三宇宙飛行士を招き，実験成果等の報告をしていただくとともに会員との意見交換が行われました。

なお，「学術分野における国際貢献について」の会長談話を22日付けで発表しました。

総会3日目は，文化としての学術特別委員会を始めとする各特別委員会，各常置委員会が開催されました。

## 平成4年度日米学術交流について（会長談話）

平成4年10月21日

1　本年度の日本学術会議の二国間学術交流事業として，9月27日から10月11日までの2週間にわたり，私を団長とし，各部所属の会員7名，その他事務局2名，計10名で構成する代表団がアメリカ合衆国を訪問した。

2　今回の日米学術交流は，21世紀に向けて我が国の学術の発展向上を図るためには，日米両国の緊密な連携協力が不可欠であることから，アメリカ合衆国の学術研究の現状と動向について調査するとともに，関係機関の責任者等と忌憚ない意見交換を行うためであった。なお，この機会に，いわゆるビッグ・サイエンスの象徴ともいうべきＳＳＣ，ＮＡＳＡ，ＮＩＨ等の現地視察を行った。

3　連邦議会の会期末で1993年度予算案の調整等のため極めて多忙な時期であったにもかかわらず，いずれの機関においても，トップ又はそれに準ずる責任者が自ら出席するなど，代表団は温かく誠意あふれた応接を受け，関係者の日本の学術への期待が極めて大きいことが印象的であった。代表団の感想として特記すべき点をいくつか挙げれば，次のとおりである。

(1)　アメリカ合衆国の学術政策の基盤は，確固たるものがあり，これに割り当てられる国家予算のスケールも大きい。これは，学術に対する同国の期待の大きさを表すものである。例えば，1863年にリンカーン大統領のイニシアティブで設立された科学アカデミーは，政府からの独立を前提とし，政府，議会の諮問に応えるなど，政府，議会との緊密な連携の下に，国民並びに人類の福祉の向上に寄与しているが，その後設立された工学アカデミー，医学会とともに，総額約250億円余に上る予算を毎年政府から受け取っている。これは，日本学術会議の使命と今後の発展を考える上で参考となるものである。

(2) 学術の国際協力については，日米両国は，経済力，先端科学技術の水準から見ても，世界の中で指導的役割を果たすべき立場にあり，両国の学術交流を中心として新しい時代の知識と技術を創造し，人類の発展に寄与していく必要がある，との認識がアメリカ合衆国の関係者にあり，我が国としても，このことを考慮すべきである。

(3) 日本政府が本年4月に決定した科学技術政策大綱における国家予算の倍増計画については，アメリカ合衆国の関係者は，大きな期待と好意とをもって注目している。

(4) ＳＳＣ，宇宙開発などのビッグ・サイエンスについては，それぞれの計画が学術における開拓者精神とでもよぶべき情熱をもって推進されていることをが，認められた。特に，3名の日本人宇宙飛行士達との懇談は感動的ともいうべき印象を残した。

また，ＳＳＣ計画への資金面での参画問題については，我が国の学術研究の基盤自体が不十分であり，これの充実強化が優先的課題であること，欧州やアジア諸国等との協力をどう考えるか，ＳＳＣ計画自体への国民の理解をどう促進するか，など今後早急に検討しなければならない課題があること，などの当方の説明に対して，これを傾聴する姿勢が見られた。

4 今回の日米学術交流の間に形成された代表団の一致した認識は，冷戦終焉後の新しい世界秩序形成過程における諸課題の一つとして，学術のあらゆる領域にわたっての国際協力が今後ますます重要性を持つということであった。そのことは，今回の代表団へのアメリカ合衆国側の対応からも十分窺われるところであった。

5 代表団としては，今回の訪米の結果について，総会，運営審議会，その他の関連の委員会等において会員に報告するとともに，政府関係者に対しても，必要に応じて報告を行う予定である。その上で，日本学術会議会員はもとより，政府並びに国民の間で，我が国の学術に関する国際協力・貢献の在り方について十分な論議が行われるよう強く期待するものである。

6 終わりに，今回の代表団の訪米に当たり，格別の御協力をいただいたアメリカ合衆国側関係者及び在アメリカ合衆国日本大使館の関係者に対し，ここに深い感謝の念を表するものである。

## 学術分野における国際貢献について（会長談話）

平成4年10月22日

現在，我が国の国際的な貢献が強く求められており，各方面でその方策が討議されているところである。日本学術会議としては，平成3年10月の第113回総会において，時の坂本三十次内閣官房長官から，学術研究の分野で我が国がどのような国際的貢献をなすべきかについて全学問領域から総合的に検討するよう求められ，以来，特別委員会を設けて検討するとともに，今回の第115回総会においても，会員全員による討議を行った。

今回の総会での討議を踏まえ，私としては，次の点を強調したい。

1 本来学術の国際貢献とは，日本における学術研究の成果を広く世界に伝達・発信し，学術の進歩に貢献することである。

2 海外から研究者が進んで来日し，優れた研究成果を挙げられるような高水準の研究施設を整備するとともに，外国人が日本の文化・学術を吸収する能力を高められるような諸条件を整備・充実する必要がある。

3 上記2を実現するためには，省庁の枠を超え，官民の総力を結集して，必要な資金の確保，人材の養成等についての基本方策を策定し，推進する新しいシステム（例えば学術協力機構）が必要である。

上記の趣旨を踏まえ，本会議としては，具体的な貢献策について提案すべく，全力を挙げて検討し，速やかに結論に達したいと考えている。

## 日本学術会議主催公開講演会

本会議では，毎年公開講演会を開催しています。この講演会は会員が講師となり，一つのテーマを学際的に展開しています。平成4年度最後の公開講演会が決まりましたので，お知らせします。多数の方々の御来場をお願いします。入場は無料です。

公開講演会「科学技術を通じての国際貢献」

日時　平成5年2月22日(月) 13：30～16：30

会場　日本学術会議講堂

演題・演者

「日本の科学技術」　西澤潤一　第5部会員（東北大学学長）

「社会科学と自然科学との学際研究を通じての国際貢献」　松田武彦　第1部会員（産能大学学長）

「日本の貴重な体験の伝授」　猪瀬　博　第5部会員（学術情報センター所長）

「21世紀の科学技術」　近藤次郎　日本学術会議会長

〔申込み先〕　はがきに，住所・氏名・郵便番号を明記し，2月15日までに下記宛てお申し込みください。

〒106 東京都港区六本木7－22－34
日本学術会議事務局「公開講演会係」
☎ 03－3403－6291 内線 227,228

御意見・お問い合わせ等がありましたら，下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木7－22－34
日本学術会議広報委員会　電話03(3403)6291

日本医学会だより
JAMS News
1992年10月 No. 8

日本医学会
〒113 東京都文京区本駒込2-28-16
日本医師会館内 TEL 03-3946-2121

## 第96回日本医学会シンポジウム

第96回日本医学会シンポジウムは「骨髄移植」(シンポジウム組織委員は，高久史麿，浅野茂隆，京極方久の3氏)をテーマに，1992年11月13日(金)，午前10:00～午後5:00，日本医師会館の大講堂で開催される．プログラムの概要は下記のとおりである．

**I. 骨髄移植の現況**

1. 同種骨髄移植／小寺　良尚（名古屋日赤）
2. 自家骨髄移植／大平　睦郎（国立がんセ）
3. 新しい移植法としての末梢血幹細胞移植(PBSCT)／高上　洋一（徳島大・小児）
4. 公的骨髄バンクの現況／高久　史麿（国立病院医療センター）

**II. 移植後のリンパ・造血病態とその修復**

5. HLAのDNA解析とその臨床応用／猪子英俊（東海大・移植学）
6. GVHとHVGの発症機序／鈴木　元（放医研・障害臨床）
7. リンパ球機能分子を介した特異的免疫抑制／奥村　康（順天堂大・免疫学）
8. 各種サイトカインの作用機構と有用性／浅野　茂隆（東大・内科）

**III. 移植後の再発の対策**

9. GVLの誘導／南　陸彦（横浜市大）
10. Ex vivo purging／岡本真一郎(東大医科研)

**総括及び討論**

なお，参加費は無料で，希望者は日本医学会宛ハガキで申し込むことになっている．

## 医学賞・医学研究助成費の選考

医学賞・医学研究助成費選考委員会では，日本医学会が日本医師会からの委託を受けて，その選考に当たることになっている．平成4年度の選考委員会は1992年9月8日(火)に行われ，下記のとおりの決定をみた．

平成4年度日本医師会医学賞は推薦15件の中から下記の3名に決定した．

**基礎部門**

加藤隆一（慶大・薬理学）「薬物代謝酵素に関する分子薬理学的研究」

**臨床部門**

青木延雄（東医歯大・内科学）「アルファ2プラスミンインヒビターの発見とその臨床的意義の解明」

稲富昭太（滋賀医大・眼科学）「MRIによる眼球運動の研究とその応用」

平成4年度日本医師会医学研究助成費は，推薦61件の中から次の15件が選ばれた

**基礎部門**

「神経組織に特異的な接着性膜糖蛋白質の構造と機能の研究」植村慶一（慶大・生理学），「クラスII MHC遺伝子導入腫瘍を用いた腫瘍拒絶反応の効果的誘導」中山睿一（岡山大・免疫学），「$\gamma\delta$型T細胞の分化と機能」吉開泰信（名大病態制御研・免疫学），「肺癌の組織発生，細胞動態，増殖及び分子生物学」河合俊明（防衛医大・病理学），「脳腱黄色腫（CTX）の遺伝子診断」脊山洋右（東大・生化学）

**社会部門**

「原爆被爆者データベースの構築とシステム化に関する研究」早川式彦（広島大原爆放射能医研・疫学）

**臨床部門**

「顆粒リンパ球増多症の病態と治療に関する研究」押味和夫（東女医大・血液内科学），「Helicobacter pylori 感染性を有するサルにおける感染実験」福田能啓（兵庫医大・内科学）「インスリン非依存型糖尿病における膵ラ島アミロイド蛋白に関する研究」三家登喜夫（和歌山医大・内科学），「アポEのコレステロール代謝における意義－発生工学的手法を用いた解析」山田信博（東大・内科学），「Secretory leukoprotease inhibitor（SLPI）遺伝子の発現調節」阿部達也（東北大抗酸菌病研・呼吸器内科学），「日本人に多発する難治性ぶどう膜炎の分子遺伝学的研究」大野重昭（横浜市大・眼科学），「リンパ球除去による immunomodulation－腎移植における応用」田島　惇（東大分院・泌尿器科学），「癌転移に関する新しいファクター，MIA 抗原と MRP-1（CD 9）に関する研究」三宅正幸（北野病院・胸部外科学），「ヒト食道癌の浸潤・転移に関する因子」塩崎　均（阪大・消化器外科学）．

なお，授賞は 11 月 1 日の日本医師会設立記念医学大会で行われ，同日，医学賞受賞の 3 教授が記念講演を行う．

**特別シンポジウム**

標記シンポジウムについて，特別シンポジウム検討委員会で検討された旨は前号『日本医学会だより』で報告したが，今回は報告書の内容（骨子）を紹介したい．

1．開催地は，一極集中を避ける意味から，東京・京都・大阪・名古屋以外の都市が望ましい．

2．開催期間は，出席者の便宜を考えて 2 日間，実質 1 日半程度が適当であろう．

3．集会は，できるだけ簡素に行うこことする．費用に関しては，原則として日本医学会がこれを負担するものとし，その財源には，現行シンポジウム費用の振替えが最も現実的なものとして考えられる．

4．その性格，内容については，以下のごとき意見が開陳された．「人間そのものを単なる自然科学とは異なる立場から眺め直したい」「歴史も含めて，医学研究とは何か，医療とは何かを問うようなものでありたい」「医学を内側から眺めるのではなく，外側から客観的に検討するものとしたい」「物理学，化学，生物学など，他の自然科学や，哲学，倫理学などの人文系学問とも対比し，対決することによって己れの姿を明らかにすることができよう」「時には，最も今日的な問題点をテーマに取り上げることによって，社会に対し積極的に働きかけることも必要であろう」

以上を総括すれば，「今日まで，主として自然科学的手法を取り入れつつ発達してきた近代医学研究については，常に，今後ともこうした従前通りの姿勢であってよいのかという危機感が付き纏っている．今やさらに広い，周辺の学問領域との係わり合いを考慮しながら，『医学の存在意義』ないし『医学哲学』を改めて模索することが重要と思われ，この方向に向けて常に考えを新たにするための特別シンポジウムを，定期的に開催することが必要であろう．」

なお特別シンポジウムは，4 年毎に開催される日本医学会総会の中間年に開催されることになっており，現在，第 1 回としては 1993 年に仙台市で開催されることが検討されている．

**認定医制についての三者懇談会**

標記懇談会は平成 3 年 12 月 13 日以降開催されていない．しかし，日本医師会が去る 8 月 25 日に行われた，学会認定医制協議会の第 22 回総会で「認定医制度についての日本医師会の見解」を発表したことから，三者のそれぞれの立場が明確になった．そこで来たる 11 月 9 日，日本医師会会館で標記懇談会が開催されることとなった．